
坊ちゃんはダメ人間

ken × 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

坊ちゃんはダメ人間

【NZコード】

NZ8525L

【作者名】

kenx2

【あらすじ】

ある大資産家の息子である向日峰広樹はどうしようもなくダメ人間である。そんな彼と彼に振り回される人々の日常を淡々と語るほのぼのストーリー。

メイド、幼馴染、姉たちの猛攻が青年に降り注ぐ。「何もしたくない」が口癖の彼がどのように成長?していくのか。

坊ちゃん 朝に弱い（前書き）

はじめまして。今回初めての投稿になります。非日常と日常を混ぜたような物は作れないだろうかと考えた結果、このような作品になりました。まだまだ未熟ですがどうぞよろしくお願いします。

坊ちやん 朝に弱い

「起きて下さい坊ちやん」

私立の高校に通つよつになつてから2ヶ月。毎朝7時にはメイドに無理やり起^さされたる毎口が続いている。

「ふあーあ、毎度毎度^{さう}苦^{くる}勞^なな」とだね^{サシナ}臥^く月^げさん

大きなびきをかいてキングサイズのベッドから一向に出よつともしない青年は向日峰^{ヒマヤマ} 広樹^{ヒロキ}。貿易業を営む両親の跡取り息子で、一言で言つと大金持ちのボンボンである。

「ほり、早く起きないとまた学校に遅刻しますよ」

といつて大きな毛布をはぎとる。

「ヒツチだなあ臥^く月^げさん。高校生に興味があるなんて思つてもいいなかつたよ」

それはそれはいかにも高級そつな寝巻きをあらわにした青年は頬を赤らめた。

「冗談ばかり言つてお嬢様に報告しますよ」

顔色一つ変えないメイドの勇ましい姿にはベッドにつかまつている広樹の心にも恐怖を感じさせた。それにお嬢様といつ単語がさらに恐怖を増大させる。広樹にとって姉の存在は何よりも恐ろしい存在であると幼いころから体に叩き込まれている。

「「」めんなさい」

今まで「つづくまつ」ていた姿からヒョイと正座姿に変わった。

「坊ちゃんがダメ人間に育つてしまつたのは我々の責任でもあります。もう高校生になつたのですから心を入れ替えて厳しく指導していきますので覚悟してくださいね」

「こ」やかに笑つて学校の制服を差し出す。毎日着ているのに綺麗にクリーニングされており、さすが一流のメイドの仕事は抜け目がない。広樹もその点に関しては一目おいている。

「朝食ができるので早く着替えてきてください」

そう言つてメイドが部屋から出て行く。考えられないほどの大好きな部屋に一人きりになつた広樹であるがずつとここの部屋で生活しているので違和感はない。

ふと一人になると大きな窓から朝田の光が部屋一面を照らしている。6月の朝はすがすがしく気温もちょうどいい。

広樹の心が無になつていると訪れるのは決まつている。

「眠い……」

起きなければいけないのは分かつてゐるが自分の欲求に素直になつてしまつ。しかも広樹は自他共に認めるダメ人間であるため自制心が効かない。意識がもうひとつしていき、体がさつきの正座姿か

リビングで朝食の用意を済ませたメイドの皐月が大きな時計を見たところ、広樹を起こしに言ってから15分が経過しようとしていた。長年世話をしてきたので、この展開はおおよそ予想できたのであるう、落ち着いた様子で小さくため息をついた。

「あれだけ忠告しているのに坊ちゃんつたり……ぜんぜんいいとこを
聞いてくれないのね……」

軽く頭をかきながら、リビングを後にして広樹のいる寝室に向かうのであつた。部屋に入つてみると案の定の景色がそこにはあつた。彼女の苛立ちもピークになつたのであらう腰まである長い髪の毛が巻き上がり鬼にでもなつたかのように禍々しいオーラが彼女の周りの風景をゆがめている。その威圧感に広樹を気づいたのか、一瞬にして眠気なんてものは吹き飛んでしまつた。実際には髪も逆立つてはおらず、ましてや鬼になんかにもなつていない。あくまで広樹の勝手な妄想に過ぎないが、それぐらいの勢いで広樹に迫ってきたのであつた。

「お、おはようござりませぬ円ちゃん。」机嫌うるわしかつて、「これこま
すね」

引きつった顔で冷や汗が止まらない。メイドである皐月だが広樹の父に世話を一存されているので彼女に頭が上がらない。

「今からやむむに回かねりとしたんだけれど、鼻唄さんもタイミングが悪いなあ」

寝巻き姿の腑抜けた姿からそんな事を言われても納得できるわけもない。そればかりか言い訳を言わると彼女にとつては逆効果であろう。すがすがしい朝日がまぶしくらいに照らしているのにもかかわらず、この部屋には何とも言えない空気が辺りを包み込んでいる。

「こんなことは言いたくなかったんですけどね。今回ばかりはハッキリ言わしてもらいます。あなたは正真証明のダメ人間です。無計画、ていたらく、その他もろもろ。あなたには旦那様の家業を継いでもらわなければならぬのですよ。そんな人が親のスネをかじつて生活をしていくのを見ていると心底呆れますよ」

広樹に指をさして今の彼女の心情をヒシヒシと語ったのであった。10秒ほどの沈黙の後、彼女の心はすつきりしたのか一コリと微笑んで

「朝食が冷めないうちにきてくださいね」と一言告げて部屋を後にすることなく寝起きの心のHPは0に等しかった。そんな彼の今できることはただただ誤ることしかできなかつた。

「じめんなさい……これから精進します」

部屋を出て行く皐月にその声は果たして伝わつたのであろうか不明であるが、広樹は椅子の上に綺麗にたたんで置いている制服を見ると我に返り制服に着替えるのであつた。朝から一騒ぎあつたせいか彼の背中はどこかどんよりとしている。無駄に広い部屋に青年が一人惨めに着替える姿は何とも無残である。こんなことは毎朝の恒例にもなつてゐるが今回のは彼女の本音が彼の心にダイレクトにダメージを与えたので今まで感じたことのないくらいブルーな気持ち

に襲われいるのであった。

『見てるよコノヤロー！ 僕だってやる時はやるんだからな。いつかギャフンと言わせてやるからな！』

負け犬と遠吠えにも等しい彼の感情は何の根拠もないものである。今の彼に何を言われてもおそらく彼女には届かない。むしろダメ人間が言う典型的な嘘としか捉えられないだろう。それくらい広樹の田じいの生活は墮落しているのだ。

メイドの待つリビングに到着するとそこには高級な皿に盛り付けられているサラダやトースト、匂いから違うコーヒーが並べられている。お金持ちのお坊ちゃんとはいへ、朝からピックリするような朝食ではないようで、一般家庭にちょっと味をつけた程度であろうか。

5メートル以上はあるであろう長いテーブルの端にチョコンと席についた青年であるが彼の貧相なオーラから言つとそこに座っているのは少し違和感がある。制服のネクタイは中途半端に解けかかっているYシャツも中途半端にズボンからはみ出している。

「坊ちゃん！ なんてみつともない姿なんですか。いくら時間がないとはいえるクラスの人たちに笑われてしましますよ。さあ早く直しましょう。」

彼女がそう言いながらネクタイを結んでいるのをいいことに、広樹はトーストをかじっている。よく見ると寝癖もそのまま田は半開

きときた。見るも無残な姿にメイドもため息をつくしかなかつた。

大資産家の息子。大金持ちのお坊ちゃん。将来有望な家計であり幼いころから英才教育を受けてきた人間の成れの果てがこんな姿だとは誰も思つていらないだろう。しかしこれが現状である。

「なあ皐月さん。俺つて何でこんな事しなきやならないんだろう。親父の会社を継ぐのはいいとしてこんな毎日縛られた生活なんて。俺個人の意見も聞いてほしいよな。運命に縛られたくないんだよ」

トーストを食べ終わった広樹は大きな窓から見える木を見ながらつぶやいた。これは彼の本音なのであろうか、それとも皐月をからかつてのことであろうか。真剣そうな顔で語っている姿を見てメイドの心に突き刺さつた。長年世話をしてきたが真剣な質問を聞いたのは数少ない。きっと何か自分の夢を見つけたのだろうかと感じさせる表情だったので、皐月はネクタイを結ぶために中腰になつていた状態からゆっくりと立ち上ると

「坊ちゃんがそこまでして考えていることがあるのですか？ そ
れなら私は何も言いません。坊ちゃんの夢を壊すようなことはした
くありませんもの私でよければ協力しますよ」

グッと握りこぶしを作り一人ハイテンションの皐月は感動のよな
ものすら覚えて目から目から涙をこぼした。

しかし、そんな皐月の声はまったく彼には届いていなかつたのだ
ろうか、広樹は大きなため息をついて

「働きたくないなあ。ダメ人間でもいいから楽な生活したい。…そ
うだ！ 姉ちゃんが親父の会社を継げばいいじゃないか、優秀な姉
ちゃんなら俺なんかよりよっぽどいいじゃないか。そうなれば会社
は安泰だし俺だつて苦労せずに生活できるんだ。そう思わないか皐

冂さん?」

10秒ほどの沈黙。そしてさつき寝室で感じた空気を感じた。

『これはまずいことを言つてしまつた…』

訂正しようと思ったころにはもう遅かったようだ。皇月はさつきまで握り締めていた手をゆっくりと開いてその手を広樹の胸倉へと伸ばした。

「ハア？　なめた事も休み休みいつてくださいよ。人生舐めてんのか？　私の感動を返せよ。せっかく改心したのかと思って協力しようと思ったのにどうこう」とですか？　旦那様はあなたに期待なさいているのですよ？　そんなことも分からないんですか。親不孝にもほどがあります」

広樹を絞め殺す勢いで胸倉をつかんでいるので広樹も言葉がうまく発言できない。ところどころ敬語がなくなっているところから察するに相当ご立腹のようだ。

「じょ、【冗談です。すみませんでした。勝手なこと言つてました。】

「うまく話せないがおそらくそんな事を言つているのだろう。今の状況では謝るしか方法がないのは本能的に分かつた。朝の数分のうちにこれほど人を怒らせるのは才能といつてもいいのであろうか。彼女が手を離すとへナへナと床に座り込んだ広樹である。皇月も我に返つて少し恥ずかしさもあったのであらう頬を赤らめて話を続けた。

「とにかく今は学校に行ってください。私の期待を裏切らないでく

ださいね

「いやかに微笑むと広樹も少しばかり落着いた。テーブルのコーヒーを一気に飲み干した。彼女もきつい事を言ってくるが最後は爽やかに微笑んでくれるので憎めない。なんだかんだで広樹を心配してくれているのだろうと感じる瞬間もあるのだ。

そんなこともする間に時計の針は8時20分を指していた。これからだと学校へは徒步で10分以上かかるので、のんびりしていっては30分からはじめホームルームには遅刻してしまう。広樹は半ば強引に学校へと向かわせられるのであつた。

「いつからしゃい坊ちゃん。しっかりと勉学に励んでくださいね」

彼らが住んでいる家から50メートル以上先にある門まで見送りに来ると小さく手を振った。

「まつたく…あの人には適わないな

周りの家も相当大きな家ばかりが建っているが、彼の家に関しては比べ物にならない。そんな高級住宅街を品のない青年が歩いている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8525l/>

坊ちゃんはダメ人間

2010年10月16日13時48分発行